

今月（7月）の英国下院総選挙は、最大野党・労働党の圧勝で14年ぶりに政権交代しました。選挙では教育分野の取り組みとして、「数学（算数）」教育のあり方が争点のひとつになりました。

日本の報道では、与党・保守党のスナク首相は英国人口の8割超を占めるイングランドの全児童・生徒を対象に、「18歳までの数学必修化」方針を打ち出し、労働党は「優先すべきは初等教育」として、小学校での「数学（算数）」教育の充実を訴えたようです。

でもなぜ、先進国・英国の総選挙で「数学（算数）」教育が関心を集めたのか。

日本はどうでしょう。いま、書店に「おとなの算数」関連の本が何種類も並びます。つい、おとなが算数？と思ってしまいます。英国は若年、日本はおとな。異なる世代で高まる算数熱。理由はなんなのか。この「難問、を解くヒントを求めて、講座「おもしろ算数教室」で数十年ぶりに算数と格闘しました。

受講したのは、小学校1、2年生（ていがく年）と3、4年生（中学年）を対象にした2コー

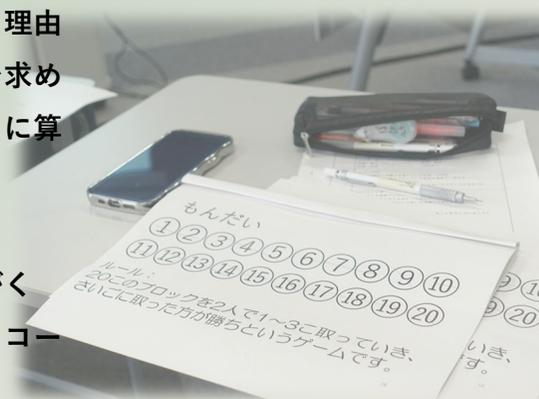
講座「おもしろ算数教室」から

算数が、あつい

ス。ゼミ生3人がサポートします。どちらも勉強というより「数字で遊ぶ」といったふうでした。とわいえ、向き合うのは数学的な考え方をしないと解けない問題ばかり。たとえば、「1, 1, 2, 3, 5, 8…」の順にならんだ数字に隠されたルールを読み解く。「数独」を応用した問題など。いずれも答えを聞けば「なるほど」と思うけれど、視点や発想を柔軟にしないと、おとなでもてこずってしまう。なかなかの「くせ者」でしたが、今年4月の「全国学力・学習状況調査」（全国学力テスト）の小学校6年生算数で「予習」していたので事なきを得た、はずです。

久しぶりに数字の楽しさを味わったことで、「いま」の算数学習をもっと知りたくなり、広く使われる6年生の教科書（※1）をめくってみました。

たとえば、単元「データの見方」。データ全体の特徴を代表する値（平均値、最頻値、中央値）の意味と求め方などを学習したあと、身のまわりのデータを使って学びを深める学習例が載っていました。



内容はこうです。①テーマを見つける（疑問に思ったことなど明らかにしたい問題を定める）②計画を立てる（どんなデータをどのように集めるとよいか考える）③データを集めて整理する④分析する（目的に合わせて表やグラフに表し、データの特徴を読みとる）⑤結論をまとめる。

驚きました。小学生でここまで考えるのか。これは、ものごとを合理的、論理的に考える基本的な思考方法です。

教科は異なりますが昨年、国語教育に携わる小、中、高、大学の各教員と集まって話す機会がありました。そのとき、初等教育の重要性を話していたことを思い出しました。

「おとなの算数」には「脳トレ」や「昔のリベンジ」としての再挑戦もあります。

それ以上に、毎日のくらしやビジネスで、計算力や分析力の必要性を感じて、参考にすることも少なくないようです。

たとえばビジネスでの客観的な議論には「数学的思考力」が不可欠ともいわれます。具体的には、把握力、選択力、分析力、予想力、表現力などのようです。どれも6年生の教科書の例に当てはま

<メモ>

講座「おもしろ算数教室」5、6年生コースは、11月16日（土）の開講です。絶賛、受け付け中。



おもしろ

算数 × 算数

おもしろ



るような気がします。

数学的思考を活用して社会の諸問題にアプローチする「数理科学」も知られています。

英国の総選挙で「数学（算数）」教育が争点になったのは、社会で需要が高まるデータ分析や統計処理の能力が、今後の経済成長には必須と考えたからです。

経済協力開発機構（OECD）2022年の国際学習到達度調査（PISA）によると、81カ国・地域の15歳を対象とした数学的リテラシー（※2）は、英国14位、日本5位でした。

ただ、特定の教科や科目を特別視することは、感心しません。学校での学びは、おとなになってからも、いろいろな場面で顔を出すでしょう。どの学びも大切にしたい。

一方で、将来のことをあまりに意識するのはどうか、とも思います。学ぶこと、考えることを純粹に楽しむ。このことも忘れたくない。「おもしろ算数教室」は、気づきや学び考えるおもしろさ（楽しさ）も伝えてくれた気がします。

（地域連携センター）

※1 「小学算数6」教育出版、令和6年度

※2 さまざまな文脈の中で数学的に定式化し、数学を活用して解釈する個人の能力。